

1章 村の概要

1 節 自然環境

1位置・面積

中札内村(なかさつないむら)は北海道十勝地方の南部にある自然豊かな村である。村の西側には日高山脈が南北に伸びており、村のどこからでもその荘厳な姿を望むことができる。北側は帯広市、東側は更別村、南側は大樹町、そして山間部を超えた西側は新冠町と新ひだか町に接している。帯広市の中心街からは約 30km で、十勝唯一の空の玄関口であるとかち帯広空港からは車で約 15 分の距離で、立地には比較的恵まれている。

図<十勝総合振興局内の位置>

図<中札内村の全村図>

東経 143 度 8 分、北緯 42 度 41 分とローマやシカゴなどに近い緯度ではあるが、内陸で山に囲まれており冷気が逃げず、湿度が低いことから他の地域に比べると寒さが厳しい。

面積は 292.58 km²で十勝管内では更別村、士幌町に次いで3番目に小さい。村内の地目は畑や山林が多く、全体の面積のうち約●%を占めている。

表<地目別面積>

2気候・気象

本村は寒暖差が激しい。上札内観測所のデータによると平成 23 年から 15 年間の最高気温は平均 32.9℃、最低気温は-23.5℃で、年間 50℃以上の差がある。特に春や秋は1日の間でも気温の幅が大きく、例えば令和 8 年 5 月の平均気温差は 13.6℃である。朝は寒くて上着を

羽織っても、昼間は半袖で十分という日もある。

「十勝晴れ」と称されるほど晴天が多く、札幌市や旭川市などと比較すると降雪量は少ない。台風は太平洋側へそれるため十勝地方に上陸することは少ないが、台風の影響で発達した停滞前線により 8 月～10 月は集中豪雨が発生しやすい。

図<気温・降水量・晴天日数の推移>

春に多いのが「日高おろし」と呼ばれる西からの強風で、冷たい空気が日高山脈沿いに十勝平野へ強く吹き下ろすことによって発生する。馬の糞が巻き上がるほどの風だったことから「馬糞風」とも呼ばれ、畑の土や種子が吹き飛ばされないように防風林が植えられた。春は遠く大陸から黄砂を運んでくることもあり、空がうっすら白色や黄色にかすむ。

3地質・地勢

【地形の形成】

北海道の北東側にあるオホーツクプレートが南西へゆっくりと移動し、ユーラシアプレートを押し上げることによって現在の位置に日高山脈を形成したのは約 1000 万年前である。その動き

は十勝の中央部を徐々に窪ませ、一帯を海にした。約 500 万年前、中札内村市街地は海の中だったのである。その後、火山や地殻変動などの影響によって海は次第に湖や湿原へと姿を変えていった。

図<プレートの位置図>

図<内海の図>

約 70 万年前には日高山脈が再び激しく上昇し、山脈から流れる水は川となって多くの砂礫を下へ運び続けた。それらが扇形に積もり大規模な扇状地を形成するにしたがって、湿原は埋め立てられ現在のような陸へと姿を変えていった。南十勝はその時に形成された「光地園礫層」に覆われており、今でも戸鶯大橋右岸地域などで礫層を観察することができる。

日高山脈から流れる川はゆっくりと場所を変え、時には氾濫しながら大地を徐々に削り、それを数十万年繰り返すことによって階段のような地形「河岸段丘」を十勝全域に形成した。

図<中札内村周辺の地形図>

図<河岸段丘のイラスト>

【土壌】

札内川流域は川の水が運んだ土砂が堆積してできる沖積土壌に覆われている。それ以外はほぼ全域が火山灰土で、多くは支笏火山や樽前山、恵庭岳などから飛んできたものである。火山灰は粒子が大きいほど先に落下するため、十勝につく頃には小さくてさらさらの粒になっており、風に飛ばされやすい。水はけは良いが栄養を保つには不向きである。

岩石は、川や海の底に堆積したものが固まってできた堆積岩や、既存の岩石が熱や圧力を受けて構造が変化してできる変成岩などが多く分布している。

4動植物

【哺乳類】

身近な野生動物として代表的なキタキツネは、食肉目イヌ科に属し全長 1m ほどである。雑食性で小動物や農作物の他、人間の出すゴミも食料とする。北海道のシンボルの存在だが、エキノコックス症を媒介しているため村では定期的に駆虫剤を散布している。

エゾリスはげっ歯目リス科に属し全長 30cm～40cm ほどで、シマリスなど他のリスより一回り以上大きい。長い爪で木の上を自由に動き回ることができ、食べ物は木の実や果実が中心だが、時に昆虫や鳥の卵も食べる。冬は厚く柔らかい冬毛で寒さをしのぐ。

同じくリス科のエゾモモンガは市街地付近の林にも生息しているが、体長 15cm ほどと手のひらサイズで夜行性なため、昼間に目撃するのは稀である。

これら小型の哺乳類が生息する防風林の一部は帯広広尾自動車道によって分断されてしまったが、村道 30 号と 35 号には通り抜けできるようにコンクリートの通路(ボックスカルバート)と移動用の足場が設置されている。

写真 <エゾリス>

写真<ボックスカルバートと移動用足場>

林に生息する大型の野生動物にはヒグマとエゾシカがいる。ヒグマは大きいもので全長 2m を超える日本最大の陸上哺乳類である。嗅覚と聴覚に優れ、過去に食べ物を入手した場所や状況を記憶する。エサを求めて農耕地や市街地に姿を現す場合もあり、人間との接触がないよう対策が必要である。

エゾシカは体長 1.5～2m ほどで、草や葉だけでなく樹皮や農作物も食べるので、毎年農業被害が出ている。春になるとオスは角が生え変わり、山道に落下した角を発見することがある。

【鳥類】

ハクチョウはシベリアで繁殖し、極寒の冬には日本へ飛来する。川辺で見かけることが多いイメージだが、畑で食べ物をつつく姿や、灰色の幼鳥を伴い数百羽の群れでくつろぐ姿も見られる。

タンチョウは明治時代に絶滅したと思われていたが、鶴居村の地域住民らを始めた給餌活動で数を順調に増やし、令和 8 年には絶滅危惧種から除外された。近年は村の畑などに現れるようになった。体長約 1.5m で翼を広げると幅 2m を超えるその姿は迫力がある。

お土産グッズになるなど人気が高いシマエナガは、運が良ければ市街地付近でも見ることができる。尾羽を除くと 8cm ほどとスズメより小さく、羽毛で丸々とした姿が可愛い。

【水辺の生物】

幾度も清流日本一に輝く札内川は全国からファンが訪れるほどの釣りの名所であり、数多くの生き物が生息している。

北海道にのみ生息するオシロコマは全長 20cm 程度でイワナの近縁種である。特徴として、小判型の模様(パーマーク)と朱色の点が体表にくっきりと浮かび上がる。

ニジマスは釣り対象として人気が高い外来種で、成長すると全長 50cm を超えることもある。生態系に影響を及ぼす可能性があるため、生態系被害防止外来種に指定されている。

サクラマスが海まで行かず川に住み着くと、それはヤマベ(ヤマメ)となる。一生を川で暮らすヤマベは 30cm ほどにしか成長しない。村ではピョウタンの滝やまべ放流祭で稚魚の放流を行っており、村民に親しまれている。

写真<オシロコマ>

エゾサンショウウオは国の特別天然記念物であるオオサンショウウオとは異なり、北海道のみに生息する。全長 15cm 程度と小さく、池や水たまりなどに産卵し、成体になると付近の草地や森林に生息する。北海道レッドデータでは現時点で準絶滅危惧のレベルではないが特殊な事情を有するとして、「留意種」とされている。

【植物】

村の木であるカシワは降水量が少ない火山灰地に適した樹種である。樹高が高くなってくると日陰でもよく育つ木に取って代わられることが多いが、十勝地方は長期間安定してカシワ林が続いている稀なケースである。6 区のかしわ公園や共栄の防風林には樹齢 100 年を超えるカシワが今も残っている。

村の花であるスズランは、鈴状の白く可憐な花を咲かせるユリ科の花である。気候変動や他の植物の拡大などにより近年は以前ほど道端で見かけなくなっている。「六花亭アートヴィレッジ 中札内美術村」の庭園内に群生しており、人気の撮影スポットである。

札内川流域に自生するケショウヤナギは、枝や葉の裏に白ロウ質を分泌するため白く見えるのがその名の由来である。国内では長野県上高地の周辺と北海道にのみ分布する希少種で、昭和 37 年に北海道の天然記念物に指定されている。

2 節 人口

1人口の推移

本村の総人口は昭和 30 年代まで 5000 人台を維持していたが、その後は減少を続けて昭和 40 年代に 5000 人を下回り、昭和 50 年代には 4000 人を切っている。要因として高度経済成長期における都市部への人口流出が顕著になったことが考えられる。

昭和 60 年頃には高等養護学校の開校や札内川ダム工事関係者の移住などにより、若干の人口増加が見られた。平成 9 年に札内川ダム工事が終了すると微減したものの、分譲地の造成や子育て支援策、移住定住施策などにより平成 26 年頃まで 4000 人台を保ち続けた。

現在も人口減少は続いているが、日本全体で急激に人口減少が進む中で本村は大幅な減少を食い止めているといえる。令和元年から●年連続で社会増(転入者数が転出者数を上回る)を達成しており、令和 10 年●月現在、本村は道内で最も人口の多い村である。

図<総人口と社会増減の推移>

年代別にみると 20 代の転出が多く、就職によるものと推測できる。転入は 30 代と 40 代が多く、子育て世代の村への移住が多いことがわかる。

平成以降は年少人口(0～14 歳)と生産年齢人口(15～64 歳)が減少の一途をたどっている一方で、老年人口(65 歳以上)は平成初期に年少人口を上回り、その後も増加し続けている。令和 9 年 1 月現在の本村の高齢化率(総人口に占める 65 歳以上の人口の割合)は●%である。全国平均の●%、十勝管内 19 市町村の平均●%と比較すると深刻な状況ではないが、このペースで出生数が減り続けた場合は少子高齢化がさらに進むことは確実である。

図<年齢3区分別の人口推移>

平成 20 年代後半から外国人の人口が増加し、令和 9 年 3 月末時点で●人となった。ほとんどは農業や食品製造業などの分野における技能実習生である。20 代から 30 代の若年層が多く、国籍はベトナムやフィリピンなどアジア圏を中心に多くの国にわたっている。

表＜外国人の人数(国籍上位 8 か国) 平成 20 年・令和 9 年の比較＞

2産業別人口

国勢調査の結果から、本村の就業者数は平成 7 年頃から減少したものの令和 7 年には微増していることがわかる。これは第 3 次産業の●分野における女性の就業者が増加したことによるものである。

第1次産業の人口は令和 7 年時点で●%だが、平成 2 年には 33.3%で約 3 人に 1 人だったことを考えるとかなり減少している。第 2 次産業の人口減少はさらに著しく、平成 2 年の半分近くになっている。その分第 3 次産業は増加して 50%以上を占めるようになっており、本村の産業構造の移り変わりをみてとれる。

図＜産業別就業者数の推移＞

産業分類を年代別にみると、建設業や運輸業、飲食業などのサービス業において 50 代以上が●%を超えており、高齢化が進んでいることがわかる。一方で製造業、金融業は 40 代までの割合が比較的高くなっている。

図<産業大分類 年齢別就業者数>

2 章 村の略史

1 節 江戸～大正

1 江戸時代の十勝

江戸時代の北海道はそのほとんどがアイヌ民族の暮らす生活の場であった。十勝においても同様で、各地にコタン(アイヌ語で「村」の意味)が存在していた。

アイヌ民族は林や野山などを特定の誰かの所有物とはせず、共同利用する考え方をしていたが、和人(本州以南に住む日本民族)は北海道全域を自分たちの領土として定めた。十勝地方は松前藩により「トカチ場所」とされ、特に海岸地域は和人とアイヌ民族の交易拠点として栄えた。

安政5年(1858年)には、北海道の名付け親である松浦武四郎が本村に足を踏み入れている。現在の大樹町にある歴舟川河口付近から内陸へ向かい、西札内地区でアイヌ民族の住居に一泊したという。その際に詠んだ歌が、現在の西札内桜公園の石碑に刻まれている。武四郎は原生林の生い茂る十勝内陸部を調査し、地形だけでなく当時のアイヌ民族との交流やその暮らしまで克明に記録している。

図<松浦武四郎の探検経路>

写真<西札内桜公園の石碑>

2 官庁の設置

明治2年に箱館戦争が終結すると、新政府は開拓使を設置し蝦夷地の開発を推進した。当時の日本は開国したばかりで、欧米諸国に負けないようにと産業の育成と軍備の強化を政策の柱としていた。未知の可能性を秘めた北海道は非常に魅力的だったに違いない。

同年8月には蝦夷地を北海道に改称し、道内に11国86郡を置いた。十勝国は広尾、当縁、十勝、中川、河西、河東、上川の7郡であった。

明治13年には十勝、中川、河西、河東、上川の5郡を管轄する戸長役場が十勝郡大津村(現豊頃町)に開庁したが、その時の戸数は5郡合わせてもわずか60余りだった。

明治20年には十勝国7郡が釧路郡役所の管轄になり、その後も分割や統合などを経て、明

治 30 年には十勝国全域を管轄する河西支庁(現十勝総合振興局)が下帯広村に設置された。場所は現在のよつ葉アリーナ十勝(帯広市大通北 1 丁目 1 番地)の敷地内である。庁舎は 2 度にわたる火災で焼失したため、人々に「火災支庁」と呼ばれることもあったという。

図<明治 3●年の十勝地図>

写真<河西支庁跡(史跡標示板)>

3 開拓の始まり

現在の中札内村は明治 35 年に北海道二級町村の「幸^{さつない}震村」として誕生した。しかし、現在の中札内村一帯が和人によって本格的に開拓され始めたのは、少し遅れて明治 38 年のことである。大津や広尾など海岸地域に比べて内陸部であるサツナイ原野の開拓が遅かったのは、海産物の輸送や北方の脅威に対する沿岸警備が重要視された結果であろう。

和人で最初に中札内村を開拓したのは、富山県中新川郡出身の上丸^{うえまる}弥次郎^{やじろう}とされている。明治 30 年に現在の帯広市昭和町に入地した福井県の越前団体(移住者により組織された団体)に同伴し、明治 38 年に現在の元大正西 2 線村道 33 号札内川縁に移り住んだ。当時はあたり一面が原生林と雑草に覆われていたが、無願開墾(役所の許可を得ず開墾すること)の痕跡やアイヌ民族の住居跡が残っていたようである。

現在の元札内～上札内である村道 48 号～52 号付近は、明治 39 年に前多興^{まえたけい}三ら 6 戸が狩勝峠を超えて入植したのが始まりとされる。大正 3 年には公設の上札内駅^{えき}通が開設され、交通の要所となった。駅といっても汽車が走っていたわけではなく、旅行者の宿や人馬の手配、荷物の輸送などを担う休憩場所のようなものであった。入植者は順調に増えていき、大正 3 年に大島木工場と宮下マッチ工場が進出したことで工場関係者の人口も増加した。次第に商店や飲食店、医院などが開業し、上札内市街地として大きな賑わいをみせていった。

水崎儀市らが西札内の開拓に着手したのも明治 39 年である。大井上農場を中心に発展しており、明治 42 年には農場内に校舎を建築し、翌年に西札内小学校の前身となる幸震第二教育所(区画外特別教授場)として開校している。当時この周辺は区画割が明確ではなかったため、「区画外」と称されていた。

移住者たちの開墾は巨木を倒して絡み合った草を払い、全て焼いていくことから始まった。当然ショベルカーなどの重機はなく手作業であるため相当の時間がかかる。ようやく地面が顔を出しても土は固く石や木の根に阻まれ、鍬の歯がなかなか通らなかったという。住居は丸太を三角に組んで草屋根をかけるだけの「拝み小屋」や簡素な作りの「掘っ立て小屋」であり、強風に飛ばされることもあった。住居内にストーブはなく、冬は布団に雪が積もることもあった。衣服は筒袖や着物が基本で、毛布などを足や頭に巻いて寒さをしのいだ。食べ物はイナキビやソバなど雑穀が中心で、白米を食べて育ってきた移住者にとって稲作は悲願であった。

十勝開拓のパイオニアともいえる晩成社一行が下帯広村に移住したのは明治 16 年のことであるが、天候不順やトノサマバツタの大発生などに阻まれ、作物がほとんど収穫できず多くが離脱している。それほど十勝は厳しい土地だったのである。

広大な大地での新生活を夢見て石川、福井、富山、島根、徳島などから多くの者が移り住んできたが、過酷な寒さや遅々として進まない開墾作業に耐えられず去る者も多かった。

写真<おがみ ぐ や 拝小屋>

写真<開墾の様子>

4 幸震村から大正村へ

日本は明治 21 年に市町村の制度を開始したが、北海道はまだその段階にないとして適用を除外していた。明治 30 年に入りようやく北海道独自の町村制度が成立し、明治 35 年には幸震村が誕生した。幸震村は現在の中札内村の他に帯広市大正地域などが含まれており、村域は現在よりも広がった。村内に役場はなく、帯広町に置かれた組合役場が近隣町村の事務を共同処理していた。町村長(組合長)や収入役は選挙で選ばれるのではなく北海道庁長官が任命したため、現在の市町村のような完全な自治体制とはいえなかった。

大正 4 年 4 月に幸震村・売買村^{うりかり}・上帯広村が合併し、「大正村」となった。村名の由来は大正時代に生まれたからだという。しかしそのわずか 9 年後には元の売買村の一部と上帯広村が分村し、「川西村」となった。大正地域に開庁された役場が川西地域の者たちにとって遠く不便であったことや、売買地域が北海道製糖(現在の日本甜菜製糖)の工場建設や鉄道敷設などによって分村するのに十分な発展を遂げていたことなどが理由である。

大正 15 年には幕別村の一部(現更別村、上途別、古舞)が大正村に編入された。この地域は隣接する幕別村よりも、物資調達や農作物の販売などにおいて大正村との経済的な結びつきの方

が強かった。大正村への編入を希望する声が多かったのも当然だろう。

このように、明治から大正時代にかけては町村の形や関係性が次々に移り変わっていく激動の時代であった。

図<幸震村の変遷地図(明治 35 年／大正 4 年／大正 13 年／大正 15 年)>

2節 昭和

1 分村の経緯

【分村調査委員会での協議】

昭和 4 年に広尾線が開通し駅が開業していくにつれて、中札内駅と更別駅の周囲にそれぞれ市街地が形成され成長を見せ始めた。そうすると、今度は発展している2駅を中心に分村しようという声が大きくなった。

昭和 18 年 2 月に中札内・更別の両地域より大正村からの分村を求める陳述書が提出された。中札内地域は 557 人による連署であった。分村を望む理由として、大正村が非常に広域であり地形や気候、農業の経営状況などが各地域で異なることや、役場との距離が遠く不便であることなどを主張した。

陳述を受けて同年 3 月に第 1 回目の分村調査委員会が十勝支庁で開催された。支庁側は分

村に難色を示していたものの地域の要望は強く、二村に分村した場合と三村に分村した場合を想定した調査を行うことが決定した。なお、この時支庁から出席した榎本課長は、後の2代目中札内村長である。

同年10月に開催された第2回委員会では、調査の結果二分村と三分村のいずれの場合も重い負担が想定され、分村は極めて困難であると報告された。しかし各地域から出席した委員はこれに納得せず、関係者によって再調査することとなった。

2か月後には第3回目の委員会が開催され、二分村の可能性が示唆された。しかし二分村案は元更別地域が更別村に属するというものであり、中札内側から大きな反対があった。また、元更別の地域住民からも更別村への帰属を反対する陳情が行われた。

図<分村調査委員会の委員>

【戦後の分村運動】

進んでいた分村の議論は激化する太平洋戦争で一時中断していた。しかし昭和20年に終戦を迎えると、復興の中で民主化や農地改革が進み情勢が大きく変わったことで、分村運動が再燃したのである。昭和21年5月の大正村議会において大正村を大正、中札内、更別の3つに分村することを推進する議案が満場一致で可決された。その5日後にはさっそく大正村役場で分村委員会が開催されたが、ここでも元更別地区がどこに編入されるかという問題に直面した。元更別地域の住民は交通の便や学校の近さなどから中札内村への編入を希望する声が圧倒的だった。道庁と支庁、各地域の代表らで長らく協議を行った末に昭和22年3月ようやく案がまとまり、三分村の境界について合意に至った。三分村するのはこれが北海道内で初めての事例であった。

2 中札内村の誕生

サツナイ原野の開拓が始まってから40年以上を経て、昭和22年に中札内村が産声をあげた。村名は、幸震(現大正)市街地と上札内市街地の中間地点であることが由来である。分村後の中札内村民は693戸4185人で、60%以上が農業に従事していた。

初代村長には田島豊次郎が推薦され、昭和 22 年 10 月 11 日に就任した。田島氏は上札内地域で長く医師を勤めて人望が厚く、村民のことを誰よりもよく知る人物であった。村長就任の翌日には議会を招集し、井上旅館(現きくや旅館)にて第1回議会を開いた。できて間もない村には大人数で集まれる場所もなく、しばらくは旅館や寺、時には村長公宅までもが議場の代わりとなった。

新しい村をスタートするためには、役場庁舎の位置、助役や収入役の決定、吏員(職員)の任命、さらには村を運営していくための条例全てを早急に議決しなくてはならなかった。開村後しばらくは年 10 回程度の議会を開催し、新たな指導者たちによる村づくりが着々と進められていった。開村当時は庶務・土木・農政・財務・教育など 15 部門の事務をわずか 16 人の職員で取り進めた。翌年には 24 人体制になっているものの、新村を運営する当時の苦労がしのばれる。

新庁舎建設の予算確保は非常に困難で、初年度は大正村農業会の事務所を間借りして事務を行っていた。

昭和 23 年には最初の役場庁舎が現在の大通南 2 丁目 3 番地(現まちなかキッチンスタジオ)に設置された。西札内小学校の旧校舎を移転したため、一部を改築したものの学校の雰囲気が残る庁舎であった。

写真<最初の役場庁舎>

3 村の礎

新たな村づくりを進めるにあたり、各分野で徐々に基礎・基盤が作られていった。ここでは戦後に行われた農業の基盤整備とインフラ整備、そして市街地を形成した過程に焦点を当てることとする。

【農業の基盤整備】

戦後の農地改革が行われるまで、地主が土地を貸し付けて多額の小作料を吸い上げるという封建的な体制が続いていた。自分の畑を所有できない小作人は不安定な収穫量の中で小作料を納めなければならず、苦しい生活を強いられていたのである。状況を是正するため、昭和 21 年に「自作農創設特別措置法」が制定された。国が地主から土地を買い取り小作人に売り渡すことで、自作農を増やすというものである。改革に伴って事務を行う機関が必要となり、大正村は昭和 21 年 2 月に農地委員会(農業委員会の前身)を設置した。翌年の 9 月に分村したため中札内村農地委員会として発足し、地主と小作人の仲介業務にあたった。全ての事務が完了したのは昭和 27 年のことで、それまでに計約 2719 町歩(約 26.97 km²)もの畑が売り渡された。農地改革によって日本全国で農業の民主化が一気に進み、農民の生産意欲や購買力の向上などにより農村が急速に発展していく土台が作られていった。

昭和 24 年には不足した食糧を補うために「土地改良法」が制定され、各地で圃場の整備やかんがい排水事業などが進められた。本村では昭和 29 年に「中札内村土地改良区」が設立されている。土地改良区とは地域の農業関係者によって組織され、明渠排水や暗渠排水、客土などの事業実施や用排水施設の管理などを行う団体である。開始当初はとにかく主食である米を確保するため、水田の整備が最優先であった。

昭和 30 年代には土地改良事業が畑作まで拡大した。農業は所得が他産業よりも低く、格差が広がっていたため、生産性を上げて農民の生活を支える必要があった。戦前は地主中心であった土地改良が耕作者中心に変わり、農民の自主性が重視されるようになっていった。

昭和 46 年には道営畑地帯総合土地改良事業として札内川右岸地域の大規模な土地改良事業が行われている。

長年にわたる農業基盤整備が功を奏して生産性は向上し、農業の近代化や効率化が急激に進んでいった。

写真<土地改良事業の様子>

【インフラ整備】

村民の身の安全を確保し住みよい村にしていくためには、医療や交通などの適正なインフラ整備が必要不可欠である。

本村の医療機関としては大正時代から上札内に小規模な医院があったが、中札内市街に初めて開業したのは昭和 21 年のことであった。場所は現在の東 1 条南 3 丁目で「北海道農業会中札内厚生診療所」として設置された。その 2 年後には北海道農業会の解散により「中札内厚生診療所」となり、場所を国道沿い(現農村環境改善センター)に移動した。木造 2 階建てで診察室と手術室、レントゲン室を設置した他、病室 4 室に入院患者 9 人を収容できる規模であった。この他にも長瀬医院、玉尾医院などの個人病院が開業している。

交通路の整備についていえば、札内川によって分断されている本村にとって安全に対岸へ渡る交通手段の確保は重要課題であった。開拓当初は徒歩や馬で川を渡っていたが、次第に渡船場が整備されて船での移動が盛んになった。しかし増水時には流出や転覆の恐れがあり、橋の建設を望む声は多かった。

昭和 6 年に待望の「中札内橋」が建設されたが、そこからが苦難の道のりであった。木造の橋は洪水により幾度も流され、昭和 37 年には中札内村役場のダンプカーが橋もろとも落下する事故が発生(人命は無事だった)している。昭和 27 年には上札内橋が竣工となったが、こちらも洪水被害を受けている。この状況を受けて流される心配のない頑丈な橋への架け替えが陳情された。その後、中札内橋は昭和 39 年、上札内橋は昭和 40 年に永久橋として完成している。

写真<竣工時の橋又は渡船場>

写真<流出する橋>

帯広から中札内村に電気が通じたのは昭和 6 年で、開通を喜び祝賀会が催されている。送電エリアは国道沿線の市街地のみであったため、まだ 3 分の 2 ほどの家ではランプに頼る生活が続いていた。夜間の移動や屋外作業は危険を伴い、終戦直後は石油不足で魚油を代わりにしていたという。不便な状況を打開し農家の経済安定化を図るため、中札内農協が主体となって札内川に発電所ダム(農協ダムとも呼ばれた)を整備することを決定した。暴れ川であった札内川により度々の設計変更と多額の投資が必要となったが、苦難を乗り越えて昭和 29 年にはついに送電が開始された。その年には本村に街路灯が初めて設置され、本通りと駅前通りを照らす灯りは村の明るい未来を想像させるものだった。

ところが、翌年の台風により発電所は全壊し、わずか 1 年で送電は中止を余儀なくされてしまった。協議の末に再度建設することは断念し、やむなく北電からの送電に切り替えている。なお、発電所跡はその後滝となり「ピョウタンの滝」と名づけられ、現在は景勝地として多くの人に愛されている。

【市街地の発展】

- ・昭和 24 年頃 自主的な商工会の結成 昭和 36 年に法人登記
- ・大正 3 年に森林資源を求めて上札内地域に大島木工場と宮下マッチ工場が進出。
- ・上札内駅逓の開設や広尾街道の大樹・上札内間の開通により上札内が発展
- ・大正 5 年に中保商店、同 9 年に高嶋鉄工所、同 10 年に直江商店が開業。中札内橋の架橋と中札内駅の開設も影響し、昭和初期には 38 号～39 号付近が中心市街地に。
- ・図<当時の市街地図>

●山本さんへ協力依頼中

3節 平成初期

1 村のイメージアップ推進

【自治体の広報戦略】

十勝という地名は日本の食料基地として全国的に知名度が高い。しかし、中札内村はどれほど認知されているだろうか。また、世間一般では中札内村のイメージはどのようなものだろうか。

平成に入ると地域間競争の中で他自治体との差別化を図り、自治体のイメージアップや独自ブランド化を進めようという動きが出てきた。当時はこれを自治体 CI(corporate identity)と呼んでおり、CI は元々民間企業に用いられる広報戦略の 1 つであった。具体的な取組事例としては自治体のキャッチコピーやロゴを決めて地域の特徴をプロモーションするというものがある。本村でもこの手法を取り入れて、平成 2 年に村のシンボルマークとキャッチフレーズ、イメージカラーを公募した。シンボルマークについては簡単に描くことができて親しみが持てるもので、色彩は 3 色以下という条件があった。また、愛称も記載することとなっていた。募集の結果、7か月足らずの受付期間でシンボルマーク 101 点、キャッチフレーズ 53 点、イメージカラー 25 点の応募があった。まだホームページも開設していないこの時期にこれだけの件数が集まったことから、関心の高さが伺える。

村審査委員会が審査した結果、シンボルマークには特産品の卵や豆、いもなどでできた「ピータン」が選ばれた。考案者は中札内高校 3 年生(当時)の嶋崎真希子さんで、名前の由来はピョピョひよこの「ピー」とピョウタンの滝の「タン」を組み合わせたものである。キャッチフレーズには「ゆうきトピアなかさつない」、イメージカラーには「ブライトグリーン」(輝く緑)が選定された。これらは後に看板や印刷物、マンホールの蓋など村内の至る場所に活用されている。

図<ピータン 基本形>※シルクハットなど特徴も記載

【イメージアップ推進委員会】

村をイメージアップしていく施策を検討するため、平成 4 年に第 1 回イメージアップ推進委員会が開催された。本委員会は、村総合計画策定審議会条例に基づき村長の諮問機関として設置されたものである。主な目的は前述のシンボルマークなどを浸透させることや、村の優れた自然環境や景観を守りイメージアップにつなげることだった。

委員会が村民アンケートを実施した結果、村のたたずまいや景観への満足度が低く、特に商店街の活気のなさやまちなかの緑が少ないこと、観光客の立ち寄る場所の不足などの課題が浮き彫りになった。折しも坂本直行記念館がオープンしたばかりで芸術や景観に関心の高い観光客が大勢訪れていたため、現状の問題点を改善して村を PR するには絶好のチャンスであった。

委員会は先進地の美瑛町と富良野市を視察するなどして情報を集め、取り組むべきことについて議論を重ねた。本委員会で実施した主な施策を次にまとめる。

①イメージアップシール

平成 6 年にピータンなどをプリントしたシールを作成。縦 10 センチ、横 8 センチの大きさと、住所や氏名、メッセージの記載欄もある。多くの人の目にとまるように贈り物のパッケージなどに利用してもらうことを想定しており、5 万枚を作成して村民へ無料で提供した。

②ファームサインの推進

ファームサインとは農家に設置する案内看板である。美しく統一感のあるファームサインを設置することによって農村風景に彩りが加わるとともに、連帯感や地域活性化の意識が生まれるなどの効果もある。

村は「ふるさとづくり事業」としてファームサインへの助成を行っており、平成 6 年にその第 1 号として西札内行政区の農家 12 戸がオリジナルのファームサインを設置した。その後は西戸蔦や栄、常盤など多くの行政区で同様の取組を行っている。

写真<ファームサイン >

③景観ポイントへの看板設置

平成 6 年には村内の美しい景観ポイントに看板を設置した。設置場所は第 1 砂防ダム、一本山展望タワー、新札内丘陵農地、南常盤のシラカバ防風林の 4 か所で、木材でできた支柱と青緑色の板面を使用した景観を阻害しないデザインとなっている。

写真<看板 >

この他にも委員会では農村景観ガイドプランや景観ガイドマップの作成、シンポジウムの開催など村のイメージアップに向けて精力的に活動を行った。

これらの活動は村の魅力を他地域へアピールするものであるとともに、村民に地域の良さを再認識してもらうことで愛着や誇りを育てるものであった。また、これをきっかけとして農村を単なる生産の場ではなく、農業の営みによって形成された美しい景観や農村の暮らしの風景などに価値を見出す考え方が発展していくこととなる。

2 道の駅なかさつないの発展

●山本さんへ協力依頼中